

社会福祉実践におけるスピリチュアリティ⁽¹⁾の機能

—「障害福祉ワーカーの語り」より—

深谷美枝

1. はじめに

社会福祉実践とスピリチュアリティの関係は、歴史的に見て非常に密接なものでありながら、欧米においては実践の世俗化・専門職化とともに薄らぎ、日本においては戦後憲法に定められる公私分離により規制を受け弱められて来た。しかし、現在欧米では1990年代後半からスピリチュアリティ・ルネッサンスとも言われ、実践において新たな側面から光が当てられ、やや回復基調にある⁽²⁾。一方、日本では宗教への忌避感情が解けず社会福祉を内側から支えるエートスに乏しいまま、サービスの拡充や技術化が進められている⁽³⁾⁽⁴⁾。

そのような日本の文脈の中、「相模原障害者殺傷事件（津久井やまゆり園事件）」が起きた。それは生産至上主義、効率主義、能力主義に支配され、広く深く優生思想の浸透を許した社会の一つのメルクマールのように思え、この社会状況の中で優生思想に対抗しうる「別のまなざし」の必要性を痛感させられた。

筆者らはこのテーマを巡り、日本宗教学会第76回学術大会（2017）においてパネルディスカッション「宗教・障害・共同体—障害と共に生

きることの共同性」(代表者安藤泰至)を組織し⁽⁵⁾、また、その発表を基として発展させたものを「宗教と社会貢献」誌に特集論文として各自改めて投稿した⁽⁶⁾。

本論文は筆者の前論文の継続研究であり、前論文と同一の研究枠組みを用いてスピリチュアリティが現状の社会福祉実践の状況の中で果たす機能を実証的に探究するものである。前論文ではスピリチュアリティをキリスト教プロテスタントに限定していたので、対象をカトリック、仏教(浄土教系)に広げて「障害福祉ワーカーの語り」の分析を進める。

2. 研究の背景

研究背景となる福祉実践現場の状況、スピリチュアリティとソーシャルワーク実践等については前論文を参照されたい⁽⁷⁾。本論では特に新たに取り扱う仏教と社会福祉実践について、研究背景としてごく簡単に整理しておく。

(1) 仏教の福祉思想

仏教の福祉思想の基本は「慈悲」である。慈は「いつくしみ」を意味する友愛であり、「悲」は他者の苦に同情し、これを救済しようとするものである。他者の苦しみに耐えられない心性であり、「呻き」であり、苦悩に対する共感である。⁽⁸⁾この「慈悲」は人間のみならず万物に広がって行くところに特徴がある。つまりすべてのものに「仏性」があり、尊重されるべき存在なのである。仏教においてはまた「縁起」が大切であり、それは相関関係であって自他の対立は否定され、「自他不二」で他者の不幸を自分の不幸と見た。これが「慈悲」の根拠となっている⁽⁹⁾。つまり、つながりや循環性を重視する中での共感共苦というものが中心思想なのである。また、仏教においては平等という価値観があり、社会

的身分や階級は何の意味も持たない。

実際の行為においては「布施」が大きな価値を持っており、そこから仏教福祉が流出したと言われている⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。布施には衣食等を与える「財施」、教えを与える「法施」、怖れを取り除く「無畏施」の三施がある。また「無材の七施」といって財力がなくとも他者に良好な影響を与えることで布施が可能とされる⁽¹²⁾。

本論に取り上げる浄土教系の福祉実践に関わるスピリチュアリティについて特化してまとめてみれば、仏の道を自らきちんと歩くという「菩薩行」という捉え方に加えて「報恩行」という捉え方をしなければならないという⁽¹³⁾。自らが救われた体験を基にして、その感謝を仏恩感謝として周囲に広げていく生き方である。

(2) 日本における仏教福祉の歴史

明治期キリスト教社会福祉思想が入る以前に、日本においては、儒教に基づく仁愛思想と共に仏教による福祉思想が基盤として存在していたと吉田は述べる⁽¹⁴⁾。そこにおいては例えば「慈悲」的福祉思想として古代より中世にかけて行基、空也、一遍、無能などの仏僧らが挙げられる。

明治以降、渡辺海旭、矢吹慶輝、長谷川良信、いずれも浄土宗に属する仏僧たちが、西欧の社会事業の影響を受けながら独自の社会事業のスタイルを築き上げていった。渡辺は慈善的救済事業から社会事業への分岐点に立ち、その思想的役割を果たしたばかりでなく、現実的にも浄土宗労働共済会を設立して防貧的社会事業のさきがけとなった。西欧のチャリティに対して「共済」の思想を提唱したことで知られる。⁽¹⁵⁾ 矢吹は大正中期の日本社会事業の近代化について、慈善救済から社会事業への脱皮に大きな役割を果たした。留学して学んだ社会事業を原資として未発達な日本の社会事業の組織化に貢献したのであった。長谷川はマハヤナ学園というセツルメントを東京で始めたことで知られるが、かな

り広くの社会事業に関係し、仏教系の大学である淑徳大学を創設した。

(3) 仏教福祉⁽¹⁶⁾の現状

現在において、キリスト教系諸施設とキリスト教の関係性が希薄になりつつあるのと同様、仏教と仏教系社会福祉実践との関係性の希薄化も進展している。船本⁽¹⁷⁾は浄土真宗本願寺派の社会福祉施設の実態報告をしているが、実践に仏教的特色を含んでいるかという問いに対する肯定的回答は18.4%、否定は54.5%であった。設立当初は仏教的理念を掲げていたものの、それを含まないように定款を改訂する施設も一定あり、日本で宗教団体が社会福祉実践を行うことの困難な現状が示されている⁽¹⁸⁾。

3. 調査の方法と対象

本章以下では社会福祉実践、わけても障害をもつ人たちを支援する障害福祉ワーカーが、現場でどんな悩みや葛藤を抱えながら実践をしているか、そのなかでスピリチュアリティがどのような機能を果たしているかを、語りを通して見て行くこととする。

前論文ではキリスト教プロテスタントの三年目、四年目までの女性に限定されていたので、宗教のみならず、性別、キャリア、年齢にもバリエーションを持たせ、キリスト教プロテスタントに加えてキリスト教カトリック、仏教（浄土宗、浄土真宗）の信仰を持つ障害福祉ワーカーに信仰と実践における悩みについて、半構造面接で一時間から一時間半、自由に語って貰った⁽¹⁹⁾。倫理的な配慮としては、研究協力の呼びかけに自発的に応じた者に限定し、匿名化を条件に逐語記録化の許可を得ている。各人の「語り」の流れをなるべく生かして再構成、まとめとして実践とスピリチュアリティの機能を抽出して分析した。対象者のプロ

フィールは以下の通りである。

<p>Aさん 20代女性，社会福祉学科卒。重度知的障害者対象の入所施設に支援員として勤務，三年目。カトリックの幼児洗礼を受けている。勤務先は県立施設を指定管理化した施設で，殺傷事件のあった「津久井やまゆり園」と似た重度者中心の入所施設である。</p>
<p>Bさん 40代男性。仏教系の重度者中心の入所施設に支援員として一年半勤務，それ以前に知的障害者の作業所に二年勤務。寺の子弟ではなく，自ら浄土真宗僧侶として得度，全寮制の学校で修行。二か所の寺で住職を経験するなど僧侶歴20年以上。社会福祉関係の資格なし。勤務先法人は法話等もあり，理念的には人権重視で一定以上の実践の質を目指している。</p>
<p>Cさん 40代男性，20年目，精神障害者対象のグループホーム施設長。プロテスタントの牧師家庭生まれ。帰国子女でアメリカの神学校に学んだことあり。現在はキリスト教系法人で働くかたわら，教会を中心としてコンサート活動し啓蒙と終生型グループホーム建設のためのファンド・レイジングに努めている。社会福祉士，精神保健福祉士の資格はなし。勤務先はキリスト者職員が殆どであり，非常時の夜間対応を要するホームのため，近隣に居住している。</p>
<p>Dさん 40代男性，知的・精神障害重複障害者対象のグループホーム副施設長，社会福祉士。障害福祉関係の支援経験は2つの法人で通算8年。浄土宗の寺に生まれ，幼少時に得度し⁽²⁰⁾大卒後すぐに23歳で修行に入り僧職となる。その後地方公務員一般行政職として10数年勤務し，30代半ばより寺の仕事を副住職として手伝うかたわら，福祉の仕事を始める。現在の法人は日本の低所得者福祉をリードしている法人で，ホームレス支援の一環としてグループホームも立ち上げている。利用者は元ホームレスの他，触法障害者，元精神病院長期在院者等で構成されている。非常時の夜間対応はなし。</p>

4. 障害福祉ワーカーの語り

(1) Aさん

①カトリックのアイデンティティからの進路選択

Aさんは母親もカトリック系病院で心のケアを担当するワーカーであ

る。そんなこともあって幼児洗礼で、あまり現在は教会に行けていないが自分がカトリックであるというアイデンティティは強く、クリスチャンらしい自分の名前にも誇りを持っている。大学で社会福祉に進み、現場に就職しようと思ったのも「その人たちの助けになりたいから、教会とかで学んだことを生かして、障害持っている人たちを救えないかなと思った」からであった。

②結婚、シフトワークと私生活のジレンマ

Aさんの大卒後就職した法人は知的障害の入所施設をいくつか持つ法人であった。一か所目に配属された施設は虐待すれすれの「グレーゾーン支援」の多く見られる施設であった。そこで2年を過ごし二か所目は元県立施設を法人委託した入所施設に転勤となった。

ちょうど結婚という人生の節目の時期と重なったこともあり、私生活とシフト勤務というジレンマを体験する。

その他低賃金、職場の人間関係と入所施設にありがちな悩みが語られるが、Aさんを決定的に悩ませているのはある支援困難な利用者の存在であった。

③「県一番の支援困難利用者」との出会い

その利用者は多くの施設を経験した軽度の、精神障害を重複した女性利用者で、11月に入所して来た人であった。県一番の支援困難者と言われ、どの施設も持て余し、元県立の勤務先に引き受けられた人であった。常に不安定な状態で自傷も他害もあった。職員にも言葉の暴力や身体的暴力を繰り返す上、自殺念慮が強く自分を傷つける。

A 私に来た頃がすごくて、タオルで自分の首絞めて、泡吹いて、倒れて、それきっかけに精神病院に入院したんですけど、戻って来て。エスカレートして。

私のいる寮はその人のため、その人中心になっちゃって、今まで出来たことも狭まってしまって。職員も下手なことできない、何が写りかかるか分からない。脱走もするんで。職員がいつも付き添っています。

精神病院に何度か入って、他害がひどかったり、自殺未遂すると精神病院に入れて、入退院を繰り返している。今は入院するほどではないんですが毎日不穏で、若い職員に当たったりとか、職員に支援のやり方どうなのとか、姑みたいにねちねち、言って来る感じですか。この人が木のクズを破片で手首を切って、血を流しながらガリガリガリガリやっている時に、止めるまでは出来たんですけど、木の破片を外すために説得するのが、参っちゃったんですね。説得すればするほど、その人のペースに呑み込まれてしまって、わけが分からなくなってしまって、説得しても、辛いんだよね、とか本当はこういうのしたくないんだよねとか、言うんですけど、その人は私なんかいなくなればいいんだとか、どうして私のこと止めるのとか、私がしたいことを何故止めるのとか延々言われるんで、それを繰り返すだけでも10分以上かかり、きりがありません。

④施設の支援方針に疑問を感じる

この人をどう支援すればよいのか。その問いが次第にAさんを追い詰める。生活寮の方針では自傷行為を止めることはその行動の強化につながる、すなわち、もっと注目してほしいから自傷行為をエスカレートさせるので止めてはいけない、とされていた。しかしAさんはそうは考えられなかった。利用者の魂の痛みをしっかりと傾聴し、受け止めて寄りそうべきだと考えるようになる。

A 目の前で利用者が傷ついているのに、それを放置するのはどうなんだろうと思うんですよ。結局、傷がひどくなって治療する破目になったんですけども、私たちって利用者の何を守っているのか、ちゃんと守っているのかな、みたいな。

利用者の痛みとかを受け止めなきゃいけないのに、私は受け止めて寄り添いたいと思うんですけども、逆に。

⑤カトリックとしてのスタンスの揺らぎ

Aさんはそんな状況の中、死にたいと願う利用者を止めることに対する疑問を抱くようになる。生きるのがそれほど辛いのなら、死なせてあげることもありなのではないのかと。勿論支援する立場としては管理的にもそれはありえない。しかし、あまりに生きることの辛さを訴える利用者に対してはそう感じるようになってしまう。

A 私はこの人を無理やり生かしてんだらうな。みたいな。なんか、仕事としてはこの人を止めなければいけないわけですけども、この人の場合は止めない方がいいんじゃないかなみたいな。自分がやっていることがこの人にとっていいことなのかどうか、分からなくなってしまふ。止めることはいいことな筈なのに、当事者にとっては何故止めるのみみたいな、私は死にたいのになぜ生きろというのみたいな。止めてることで苦しめているんじゃないかみたいな。

著者はAさんにそれはカトリックとしてはどうなのか、と問いかけてみた。

F 自分のカトリックとしてのアイデンティティと死という言葉が出て来た時にどうかかわる。カトリックは自殺はいけないんじゃないの、とか。命に対する考え方あるじゃん。

A 自分としては解放してあげたい、本当は良くないと思うんですけども死にたいという思いも受け止めてあげたい。そう考えていることを受け止めて愛してあげたいな、みたいな。どんなに大変な人でも愛して受け止めてあげたいという気持ちがあるんで、死にたいとか傷つけないという気持ちも受け止めておけた

いんですけれども、受け止めたところで、その人（の魂が）が救われるのかなって。
難しいな。

Aさんはあまりに苦しい生を見ることで、カトリックとしてのスタンスから出て、一般的にいう安楽死の方に動かされている。しかもあまりそのことには気づかずに流されつつあるようだった。

⑥祈りの必要性

Aさんは利用者がこの先も職場にいるのかと思うと、精神的に自分が壊れてしまうのが怖い、という。そして勤務の前後に祈らざるを得ない。また、この人に信仰があったらどんなにいいかと思う。利用者にとっても職員にとっても祈りの場があって、そこに支えられることが出来たらどんなにいいかと思う。

A 職員の祈りの時間とか、利用者の祈りの時間とかあったらいいのかなって、個人的に思いました。彼女にも神様がいたら、辛い時にでも救いの手があったらいいのになと思ったりします。絶対的な存在があったらいいのにな、て。不穏な時にでも不穏になり切らないでいられるのになって。

⑦まとめ—Aさんの実践におけるスピリチュアリティの機能

入所施設として厳しい勤務条件のもとで、シフト制のストレスを抱えながら勤務し、祈ることがAさんにとって大変な利用者と向き合い心を壊さないためのバッファーになっている。しかし、あまりに生きることの辛さを表現し、のたうち回るような利用者の苦しみに動かされて、組織の方針に反して利用者の深い魂の痛みに寄り添うべきと考えるようになった。しかも知らずに安楽死の価値観に動かされている。無論それは利用者に対する共感からであり、それを感じられることがスピリチュア

リティの機能である。しかし、カトリックにとって自殺の是認は大きなことであり、スピリチュアリティの揺らぎが見られる。あまりに過酷な利用者の状況に揺らがざるを得ないAさんのスピリチュアリティがある。

(2) Bさん

①自然な流れの中でご縁をいただいた得度と就職

Bさんはサラリーマン家庭に生まれ育って、バイク好きで工業高校に進学し、仲間も自分も結構不良だったと語る。しかし、一つ違っていたのは感受性が大変強いことだった。

B 中学の時に普段自分が食べているプロイラーがどうやって殺されているのか、という番組を見てショックを受けました。生きる為には殺さないといけない、という、仏教でいう業を受け止める事が出来ませんでした。

そんな感受性の揺れのままに、高校を中退してフリースペースに入り浸ったり、喫茶店勤務したりするが、20代のうちに僧侶たちとの出会いによって坊主バーを開いて経営したりした。そして、そこで魅力的な数多くの僧侶たちに会い、単純に「この人たちの仲間に入りたい」と思うようになり、周囲も「お前はどうぞせ坊主になるんやろ」的な雰囲気もあり得度して全寮制の修行と学びの場に入った。卒業後、障害者の作業所で2年働いたり、寺の住職になったりと転々とする。岩手の寺の住職になったことをきっかけに、知り合いから紹介されて仏教系の障害者入所施設に勤務するようになる。得度の経緯については偶々、と答えるようにしているという。

②ベテラン職員が燃え尽きる現場

勤務した施設は行動障害を持つ重度者の多い、しかもかなり人権に配

慮した施設であったがそれ故に、鍵を使って利用者が暴れた時に閉じ込めることなどしない方針であった。それが災いして体を張って職員が暴力や他害を阻止するので暴力を受けることが多く、ベテラン職員でも複数名がその結果、欠勤や休職し、勤務体制はボロボロであった。

③強度行動障害の利用者と対峙して

Bさん自身も強度行動障害の利用者と対峙して追い詰められる経験をしている。それは2号室の利用者さんであり、聴覚過敏で長時間不穏状態になる人であった。

B 2号室の利用者、仮にXさんとすると、Xさんは、ほぼ毎日、何度も何度も不穏を起こしていました。何しろ、触られるのがイヤ（でも紙パンツ）。女性の声もイヤ。音に敏感な事もあってか、煩いのもイヤ。嫌いな同じ寮の利用者が楽しそうにしているのもイヤ。お腹が空くのも当然イヤ。なので、殆ど毎日何度も不穏状態で、長ければそれが一度に1時間以上続いたりもしました。不穏になる原因は、当然、私の支援ミスなのですが、もう、正直疲れます。基本、職員不足なので、日中活動も寮も男性は私1人で支援する事が多く、食事の準備などもしなければなりません。そんな中で不穏になり、暴れ出されると、私の疲れもあってか時折「うっとおしいお」と思う事が多々ありました。そして「こいつさえいなければ…」と思う事も多々ありました。

追い詰められたBさんは、その利用者さんを排除したい思いに駆られていった。

④蛇蝎のごとき己を阿弥陀に見せられて

浄土真宗はすべては阿弥陀の計らいによってなされる「絶対他力」、「られる・られるの世界」である。利用者Xさんとの関わりを与えられて、

親鸞の言葉に照らされて、Bさんは罪業に満ちた己の姿をまざまざと見せつけられたと感じた。

B 親鸞の言葉で「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり」というのがあります⁽²¹⁾。それは、まさに罪悪深重煩惱具足の私を照らし出す言葉でした。(中略)

Xさんは施設に入っている利用者です。家族が大変だから、施設に預けている利用者です。大変なのは当たり前です。でも、Xさんに対して「こいつさえいなければ…」と、Xさんを心の中で殺してしまう事が多々ありました。

でも、それはXさんが私の正体を見せてくれただけの話です。自分の都合の良い人としか生きようとせずに、都合の悪い人は殺そうとしている私の正体を見せてくれただけの話です。Xさんを通じて、阿弥陀如来が私の正体を見せてくれただけの話です。

⑤阿弥陀により頼む—悪人正機の靈性

そこでBさんは念仏に向かい己を阿弥陀に委ねる。己の醜い姿に出会った時こそ、正しい救済の契機となるからだ。悪人正機の靈性、つまり「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや」⁽²²⁾の靈性である。己の善に頼むことの出来ない悪人の方が念仏して極楽往生するための正しいチャンスを得ているのである。

委ねることによって、己のかけがえのなさを再認識し、他者の大切さを再認識する。そこから他者に詫びて念仏と共に祈り心を持って生きていこうとするBさんがいる。

B Xさんが不穏になると、施設の男性寮内の空気が一変しますし、また、他の事が出来なくなったりして、私のストレスが大変な事になります。そんな時に時折、口から勝手に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と念佛が出て来ます。私にとっ

て都合が悪ければ、心の中で殺してしまうのが私という存在です。そんな罪深い存在でしかありません。(中略)そして、そういう存在としての私しか、この世には居ません。他の誰とも違う、たった1人のかけがえのない人生の私です。それはXさんも同じです。だから、「ごめんなさい」と、Xさんに謝罪します。(中略)施設への出勤前、帰宅後には必ず本尊に手を合わせて念佛申していました。

⑥ 自他不二，平等覚の靈性

Bさんの語りの中でスピリチュアリティの基礎に「平等」ということがあった。

B ただ、ずっとこだわっているのは、やはり、特に「雑草」なり「害虫」と呼ばれる生命の事です。横浜でもホームレス殺人事件があったと記憶していますが、排除です。自分にとって都合が良い悪い、あるいはそれが「社会的」なりの言葉で正義的なオブラートで包まれたりして見え難くなったり。仏教を学ぶようになり、他人を排除する事も自分を排除する事も結局は同じなんだ、という事を教えていただきました。都合が悪ければ「こんな私なんて…」になる。それは自分自身を排除する事であると。

他者排除も自己疎外も同じことである。他者排除は結果的に自己疎外をもたらす。これはキリスト者のインタビューでは聞かれたことのない思想であった。これは阿弥陀如来の救いの光はとどまることなく全てを照らそうとする。それを遮り線を引こうとすることはしてはならないことで、自分にもその光を届かなくするという思想であり、平等覚とか大乘仏教では「自他不二」とも呼ばれる。⁽²³⁾ 直接は言及されていないが、福祉実践の動機づけとなる思想ではないかと推察される。

⑦まとめ—Bさんの実践におけるスピリチュアリティの機能

Bさんにおいてスピリチュアリティは、利用者を排除したいと考えそうになる時にそれをとどめるバッファー効果がある。そして自己の否定的な面を受け止め、それを超越者に委ね、自己と他者のかげがえのなさを再確認するという人間としての内的な深まりを体験している。また、基本的な利用者観を形作り、平等という価値に立って利用者に関わることの基礎を提供している。

(3) Cさん

①紆余曲折を経て導かれた道

Cさんは牧師家庭の出身である。教会に行くのが当たり前で、一定の年になり自分から洗礼を受けた。進学の時も親は神学校に行くことを条件にした。当時アメリカで家族で生活していたため、アメリカの神学校二つを経験することになる。

しかし、サッカーの選手になりたいと思ったため、中退。親に勤当される。そしていよいよプロサッカー選手への道が開かれそうになった時に、じん帯断裂という大けがをし、サッカー選手への道を断念せざるを得なくなった。日本に戻ったCさんは親に向かって信仰を棄てる宣言をし、教会から離れた。医者から40歳で歩けなくなると言われて、途方に暮れた時に、手術した病院のリハビリの施設長から声をかけられ、リハビリ助手として就職したのが福祉の入り口となった。

その後八回も手術を繰り返し、就職後二年にして解雇を言い渡される。すぐに現在の職場にアルバイトとして就職するが、三か月後にガンで余命宣告されている施設長から施設長就任を要請されて受諾、グループホーム施設長となった。

30歳で友人たちの「たくらみ」によって教会に連れ戻され、結婚を機会に本格的に信仰に立ち戻って現在に至る。若い頃にしてきた音楽活

動も教会奉仕のために再開することになった。

②先輩職員たちの連続自殺

就職したグループホームは精神病院からの退院者が多く、不穏になった時の夜間対応が求められることの多いホームである。職員は不意の呼び出しに応じられるように近隣に居住している。バーンアウトまで、職員は持って三年、と言われていて緊張感の高い職場であった。

就職して間もないCさんを襲ったのは、キリスト者である先輩職員たち三人の連続自殺であった。とりわけ伝道師として働いてもいた先輩が首つりで亡くなった後、施設長になりたてのCさんは批判の矢面に立たされた。

Cさんは辞めようと決意するところまで追い詰められた。しかし、顧問医の「あなたがやめたら利用者さんはどうするの」の一言で思いとどまる。「このことは一緒に背負っていこう」という支えの言葉に励まされて重荷を少し降ろすことが出来た。当時一番強い睡眠剤を飲んでもストレスのために眠ることが出来なかった。今に至るまで夜間対応があつて眠れないため安定剤の服用は続いているという。

③メンバーを見る眼差し

メンバーは精神障害の利用者さんたちだけに、いろいろなエピソードに事欠かない。元自衛隊のメンバーが北朝鮮からのミサイル攻撃を恐れて不穏になって暴れ、保護することになった時、包丁で刺されることを覚悟して部屋に踏み込んだことがあった。そのような時も利用者につき合いきれないとか、距離を取りたいとは思わなかったという。たとい暴力を振るわれたとしても

C 辛そうだな、苦しそうだな、という風に見ていましたね。何とか荷物を持っ

で軽くしてあげられたらとずっと思っていましたね。いい時の彼を知っているの
で、戻れるだろうという、そのためにどうしたらいいんだろうという気持ちの方
が強いんだと思うんですけども。メンバーさんに暴力振るわれて辞めたいと思っ
たことはないですね。

という見方が語られる。利用者に対して、あくまでも信頼と深い共感
に立とうというスタンスが強く見られる。

④利用者の思いを拾い、実践に繋げる

現在Cさんは永住型のグループホーム、つまり期限を切られて退所し
なくてよいグループホームの建設を目指して、一億円のファンド・レイ
ジングの活動をしている。その活動のきっかけとなったのはある利用者
さんの呟きだった。

C そもそもは僕が入った時からいたメンバーで82歳なんですけど、自立支援法
に変わって通過型に変わって、出ていかなきゃならなくなった時に、「いや、俺一
人だよ」って泣き始めたんですよ。(中略) その方が行政に「ホームを出なさい」
と言われた時に、「障害者は姥捨て山か！」って怒鳴ったんですよ。すごいおとな
しい人なのに。何かその言葉が強く心に刺さって。(中略) その方がホームを出る
時に「俺が建てる！」と思わず言ってしまったんです。

高齢で身寄りのないその人は、グループホームの職員と家族同然に暮
らしていた。法律が変わり、ホームを出て高齢者施設に行くよう行政の
ワーカーに言われた時に、普段は静かな人が嘆き悲しむ姿を見て、強く
心動かされて、資金の当てもないのに自分がワーカーとしてサービスを
創り出すことを決意してしまったのである。

自分が帰国子女として疎外感を日本で感じていた歳月があったために
人の孤独に関する感性が強い、とCさんはいう。利用者を一人きりにさ

せないという思いがいつもあると。そこをきっかけにして実践に繋げる力がCさんにはある。

⑤神様が何とかしてくれる—信仰に裏打ちされた楽観主義

資金の当てがえないのにサービスを創り出すことは実は二度目である。今回もCさん一人でやりなさい、ということで一億円という高額なのに法人は全く助けてくれない。以前は小口の400万円という資金であったがグループホームの部屋の拡充のためにSNSで募金をし、一か月で集めることが奇跡的に出来た。祈って資金が集まった時にはこう感じた。

C やっぱりね、って感じた。やった、じゃなくて必要だったんだよね、満たされるんだよねってこと。500万円集まったとかそういうことでもなくて。

そこには、やはり神が助けて下さる、そして下さった、という揺るがない信頼がある。そしてそれは職員のチーム全体に共有されている、という。「いい風に言えば神様が守ってくれているから大丈夫だよ、というのが僕も他のスタッフもスタンスだ」と。そして神様がどんな風にいるんなものをつなげていってくれるのかをワクワクしながら見ているという。

⑥自然体のかかわり、フラットな関係性

Cさんは他の人から自然体の関わりが出来ていると評されることが多い。そして自然体でフラットな関わりがスタッフ間で共有されている。召命感という言葉にもCさんは否定的であった。障害者と健常者と分ける発想も嫌いで、それが良い意味であっても障害者を特別視することに否定的だ。

C もっと単純にいうと同じ人間だからというところで捉えているところが大きくて、どうしても障害者、弱者というところで分けたがる体質が日本人に多いのかもしれないけれど、そうじゃないって。聖書のどこに障害者という言葉があるの、神の愛は健常者にだけ、ってことではないじゃないですか。でも社会は分けちゃってね、そうじゃないし、教えて貰えることもあるし、でも、あんまり教えて貰えることも多いというのも嫌なんですね。

⑦キリスト教色を出さなくても伝道につながる支援

キリスト者の職員が圧倒多数を占めるにもかかわらず、キリスト教色は出さないでCさんたちは仕事をしている、という。しかし、洗礼を受けたり、教会に通い始めたりするメンバーは一定数いる。

C 僕はキリスト教色は出さないで仕事していますが、この前退去して行った若い男性は、Cさんたちみたいなクリスチャンになりたいです、とっていました。(クリスチャンだって) いつ言ったっけっていう感じです。(その人は) 近くの教会に行って洗礼の準備していたんですが亡くなったんですが。今のスタッフの雰囲気がああいう人たちになりたいと思ってもらえるなら、伝道とまでは言わないけれど、証にはなっているのかな、と。

祈り心をもった関わりが、「無言の伝道」になっているという意味付けがある。

⑧信仰に基づく分かち合いのある職場

Cさんの職場は職員間のピアカウンセリングや分かち合いがよくなされている。そういう意味で困難を一人で背負いこむことがない。また、利用者の状態が悪い時にはスタッフが共に祈ることが出来るのは相当に支援をしていくうえで有利であると感じている。

⑨まとめ—Cさんの実践におけるスピリチュアリティの機能

Cさんは20年という他のワーカーに比して抜きん出たキャリアの長さを持つ。それ故にスピリチュアリティが素朴なものから、現場経験との「往復作業」を通じて思想化しているという特徴がある。そしてその思想は施設長という立場もあり、職場エートスとして職場全体に共有され、実践のモードを創り出している。

それは利用者への深い共感とそれを実践化する力であり、信仰に裏打ちされた楽観主義であり、自然体の利用者との関わり、フラットな関係性である。信仰に基づく分かち合いと祈り、祈り心を持った支援がそれらを下支えしている。

(4) Dさん

①ボランティアとしての、法人への関わり始め

Dさんは幼少時に得度し、23歳で副住職として僧侶の仕事を始めた。そして、その後三十代半ばまで公務員の仕事と両立して来た。寺の仕事を手伝えるボリュームが増えたため、両立できる、地域に根差した仕事ということで当初、近隣の法人で知的障害者の支援施設に勤務する。社会福祉士は通信で受験資格を取得している。そして現在の法人（ホームレス支援で全国的に有名）のことを知り、理念に共鳴してボランティアで関わり始めた。その後非常勤になり、週に三日グループホームに勤務する。

②利用者の中に人間の「業（ごう）」を見る

Dさんの勤務するグループホームの利用者は、知的障害や精神障害を重複しているが、もとホームレスだったり、刑務所から出てきたりしている経済生活上に課題を抱えた利用者が多い。アルコール等の依存の問題もある。その中で一番難しいのが金銭管理指導、つまり生活保護費を

適切に日々支出することである。生活保護費は月々8万円程であるが、それを一気にギャンブルに使用してしまったりする。自由奔放に生きて来た人たちなので管理されることに耐えきれずに蒸発してしまうことも多い。嘘をつかれるということは日常茶飯事で、それが生きる手段、下手をすると子どものころから生きる手段となっている。平気で嘘をつく、という人にあったのはこの仕事について初めてであり、Dさんは最初ショックだったという。

Dさんはこのような利用者の人間性に仏教でいうところの「業」を見る。「業」とは本来は行為のことであり、言動が己にもたらす結果のことである。それは未来永劫に連鎖し、どうしても離れがたい人間の罪の連鎖、悪循環のようなものを形成し、輪廻転生とも関わってゆく。

D（利用者さんたちは）自分の欲求って言うか、コントロールできなくなって苦みの連鎖になっていく。それを実感しますね。それについて本人もなかなか自覚できなかったり、あってもどうしようもない。（中略）知的障害の現場で働いていた時に感じたのですが、人間として本質的な違いはないんだな、ってことです。障害とそうでないという違いっていうのは相対的で、違いはないんだっていうのは、今の職場で働いても変わらないですね。⁽²⁴⁾（中略）喜んだり悲しんだり、喜怒哀楽ということ、欲望とか欲求も出方が能力によって相手に伝えられるかどうかはありますが、基本的に人間として同じように欲求を持っているんだ、ということ。（中略）仏様から見ると悪にまみれてだれでも生きている存在なんであって、それは相対的なんだろうなあっていうことを考えながら、仏様の視点から言うとか不完全という意味では一緒なのかなあ、と。

障害のある利用者も支援者自身も、仏の目から見たら業において変わりはなく、平等である。人間としてのマイナスの側面、本質において等質である。それがDさんの基本的な利用者観である。しかし、その利用

者観は利用者さんを嫌になる、関わりたくなくなるというところへはDさんを導かず、人間とはそういうものと考えて関わりを保つ機能を持っている。

D 私が仏教に関わって、人間とはこういうものだと少し引いて考えることが出来ているから（利用者とかかわるのが）あまり嫌にならない。（利用者）嘘をつかれて嫌になっちゃう人はいるんですよ、困窮者の支援を志していて、（そこが）すごく嫌だという人はいますよね。

③職場のポリシーにスピリチュアリティが触発される

前述したように、Dさんは今の職場のポリシーに共鳴してボランティアとして関わり、職員となった。この法人のポリシーはソーシャルワーカーとして社会正義に立つことに基本がある。Dさんは自分のスピリチュアリティと法人のポリシーに強い親和性を感じている。また、浄土宗の教えの弱い部分を法人のポリシーやソーシャルワークの思想によって補強するなど、両者には強い相互作用がある。

D そうですね、法人のポリシーは受け入れる人を限定しないところがあって、浄土宗系の教えというのは、どんなに罪を犯した人でも信仰を持てば阿弥陀様に救われるというのがある、それはこの法人を選んだ時にそう感じたというよりも、入ってみて親和性があるなと感じてきたんです。そういうどんな人でも救われるべきだという浄土宗の世界観と法人の理念は重なる部分があるっていう、逆に言うと、そういう組織であってほしいという気持ちがあります。（中略）浄土宗は来世のことに重点をおいて、来世で悟りを開く。じゃあ、今の世界でどう生きていくか。それが弱いというか、明確なものが無い。今の世界をどう生きるか。阿弥陀様の世界を今の世界にしていく、それは浄土宗僧侶として見果てぬ夢ではあるけれど、0.1ミリでもそういう世界にするように生きていくのが道しるべなのか

な。

④まとめ—Dさんの実践におけるスピリチュアリティの機能

Dさんにおけるスピリチュアリティの機能の特徴は利用者観を形成しているということ，である。それは業という人間の否定的側面を捉えた見方でありながら，人間の平等性に立ち，利用者を過度に否定的に捉えずに支援を継続することにつながっている。そういう意味ではバッファー機能を持つとも言えよう。

そしてDさんの場合，経験年数が二番目に長いことから，実践との往復作業によって「思想化」が進んできている。それはソーシャルワーカーの倫理や職場の社会正義を追求するエートスとスピリチュアリティとの相互作用によるものである。

5. 考察

本論文で抽出されるのは、(1)ストレスや葛藤からワーカーを守る「バッファー機能」(A, B, D) (2)利用者への深い共感の源泉となる「共感機能」(A, C) (3)基本的な価値観を提供する「価値・規範提供機能」(B, C, D) (4)人間として宗教者としての深まりを生み出す「深化機能」(B) (5)職場のエートスと相互作用して個人的な実践思想を創り出す「実践の思想化機能」(D) (6)更に職場全体に共有されて職場エートスを創り出す「職場エートスの形成機能」(C) である。

前論文においてはスピリチュアリティの機能として、(1)バッファー機能(2)深化機能(3)規範提供機能(4)エートスの実体化機能、が抽出されていた。それらと整合性を考察しながら以下一つずつ解説していく。

- (1) バッファー機能 厳しい勤務条件のもとでストレスを抱えながら勤務し，祈ることが利用者と向き合い心を壊さないためのバッ

ファーになっていたり (A), 利用者を捉える価値観が提供されてそれが利用者に失望しないためのバッファーになったり (D) している。また利用者を排除したいと思う「スピリチュアリティの揺らぎ」が生じた時にそこに陥らないためのバッファーになっている。

このことは前論文においても、厳しい勤務状況の中でバーンアウトの危機にあり、兆候である「情緒的消耗感」を吐露しつつも、三人のワーカーは利用者の「脱人格化 (非人間的に扱うこと)」に陥ることなく踏みとどまって利用者に人間として向かい合い、共感的に理解することが出来ていた。過重な業務や感情労働に際して慰めや肯定感を与え、心を静めて守ること、虐待に行きそうになった時に反省的思考へと導く機能がスピリチュアリティにはあることがここでも再確認される⁽²⁵⁾。

- (2) 共感機能 利用者の激しい苦悩に対して深い共感を示したり (A), 利用者の苦悩の言葉を拾って実践に結び付けたり (C) している。

このことは前論文では機能として取り上げられないが、要求の強い利用者への共感的な洞察として表現されていたり (前論文Aワーカー, p.34) 立場の弱い利用者の代弁者として立ったり (前論文Bワーカー, p.42) と見られていた。この共感とは「Compassion」として欧米の文献においてもソーシャルワーク実践におけるスピリチュアリティの機能とされ、文献的裏付けがされる⁽²⁶⁾。

- (3) 価値・規範提供機能 本論では平等という利用者観が仏僧であるBDにおいて強く打ちだされていた。自他不二とか平等覚と呼ばれる価値観である。またキリスト者であるCにおいても平等が語られていた。仏僧であるDは業という捉え方から利用者のマイナスの側面を捉えていた。

これは前論文においても隣人愛の対象としての利用者 (前論文

ワーカー ABC), 救いの必要な人としての利用者 (AC) というキリスト教スピリチュアリティに由来する見方が見られていた。

仏教にせよ, キリスト教にせよ, 古典的宗教は人間の本性について逆説的な洞察を持っており, そのような洞察はソーシャルワーカーが利用者に対する態度を健全に保つためには必要なものである, とニーバーは述べている⁽²⁷⁾。

この機能は行動規範を提供する「規範提供機能」と併せて, 「価値・規範提供機能」としておく。

- (4) 深化機能 B は「スピリチュアリティの揺らぎ」つまり利用者を排除しようとする時に自分の罪を感じて悔い改め, 阿弥陀により頼んで再びあるべき場所に立ち返って生き直して行こうとする。この機能は直接超越者との相互作用を含む機能である。

この機能は前論文において三人のワーカー全てに見られていたが, 特に前論文 A ワーカー (p.36) にはっきりと見られていた。ワーカー A はまず愛のない自己, 本来の惨めな自己の本質に出会い, 自分には神から与えられなくては何もないという自覚と, それにも関わらず神から愛されていることを知ることになる。そこからワーカー A は自分を責めることなく無力な自己を受容することが出来た。その作業をまず神との関係性の中でした後で, 自分が他者の人生を支配しようとしていたこと, 愛に変装していた他者への支配欲に気付かされ, 解放されていった。

この深化機能についてはソーシャルワークとスピリチュアリティを取り扱った文献では書かれていない。しかし前論文と本論文においては非常に重要な, スピリチュアリティの核となる部分であると考えられる。キリスト教, 仏教浄土教系に共通な, いわゆる超越者に委ねるスピリチュアリティを持つ他力宗としての特色であると考えられる。

- (5) 実践の思想化機能 本論においてDは浄土宗と法人のポリシーに強い親和性を見出し、実践原理としての浄土宗の弱い部分を法人のポリシーやソーシャルワークの思想によって補強するなどして、自己の実践を一つの思想に練り上げる途上にある。

これは前論文で「エートスの実体化機能」としたものに当たり、ソーシャルワーク専門職としてのエートスや、所属組織の持つ理念がスピリチュアリティに一定の親和性を持つ場合、それと相互作用し、自分のものとして取り込んで定着させたり、深化させたり、実体化させたりする。スピリチュアリティ自体は背後に退いて見えにくくなるから、下支えすると言ってもいいだろう。前論文でのそれはアドボカシーであり、ノーマリゼーション原理や人権理念であった。本論ではこれを「実践の思想化」としてとらえ直した。

- (6) 職場エートスの形成機能 これは本論において、それも実践年数の長いCのみに見られる機能である。Cのスピリチュアリティがピアカウンセリングや祈りの分かち合いによって職場全体に共有されて「楽観主義」「フラットな関係性」等として職場エートスを形成している。他のワーカーもそこに巻き込まれて実践を展開している。

これは、ここでは分析しきれないが、職場エートスとの関係性として(5)と連続体の関係にあると予想される。

5. まとめにかえて

前論文の三人に加え、本論で四人の語りの分析を終えて言えることは、現状の社会福祉実践現場の厳しさの中では、スピリチュアリティが辛うじてバーンアウトしないように心を守るバッファーとなり、ぶれないように利用者観や実践基準を作り出す価値規範となり、利用者への深い共

感を生み、単なるストレスや感情労働で終わらない人間としての深化を作り出し、組織のエートスがお題目にならないような背景を提供して思想化させている、ということであった。吉田（2003）がその著の中で幾度も繰り返す、言葉も替えつつ「国民個々が『福祉』にアイデンティティを形成するには、外側の社会科学と共に、すぐれて内面的問題の宗教が重要である。⁽²⁸⁾」と言っていたことが実証的に裏付けられる形となった。

しかし、本論で取り扱ったスピリチュアリティは、まだキリスト教と仏教の浄土教系のみである。他の禅仏教等のスピリチュアリティに広げてサンプリングを行うことにより、異なった機能が見えてくる可能性も捨てきれない。また、なるべく語りの面白さを生かす形で記述したが、語りの中の様々な要素を機能の分析の中で拾い切れていないことに加えて、語りの中の諸要素の関連性も明らかになっていない。

今後の研究課題としては分析の方法をグラウンデッド・セオリー法等に替えて、社会的な諸要素とスピリチュアリティの相互作用を分析して、スピリチュアリティの機能に迫ろうと考えている。

注

- (1) スピリチュアリティ、信仰、宗教という用語はそれだけでも研究に値するものであり、カンダはその著で一章を割いている。ここでは操作的にスピリチュアリティは人間の生の一つの過程であり、意味・目的性・ウェルビーイングの探求を中心とし、自分自身・他者・他の存在・宇宙そしてそれがどのように理解されていようと究極的実在との関係の中でその探求がなされ、それが中心的に優先事項とされ、その中には超越的な感覚が含まれている、とのカンダの定義を採用しておく。宗教とはそれに対して価値・信条・象徴・行動・体験の制度化された様式であり、スピリチュアリティ・信者のコミュニティ・時間を超えた伝統の伝達・コミュニティ支援機能を含むものである。信仰は本論にお

社会福祉実践におけるスピリチュアリティの機能

いてはあまりスピリチュアリティと区別されていないが、欧米のソーシャルワーク研究では信仰という概念はスピリチュアリティや宗教ほど用いられない概念となっているため、本論もその動向に従って信仰歴という用語や、被調査者が自らのことを語る場合に限定している。カンダ, E 2014『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か』木原活信他訳、ミネルヴァ書房 pp.87-146. 原著 Canda, E. 2010“Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping”Oxford University Press.

- (2) 木原活信 2003『対人援助の福祉エートス』ミネルヴァ書房。
- (3) 社会福祉史の大家吉田久一はその著の中でその点を指摘し嘆いている。最もこの吉田の指摘は政策、地域、組織、個々の実践者レベルのどこを指しているのか必ずしも明確ではない。吉田久一 2003『社会福祉と日本の宗教思想』勁草書房、p.2。
- (4) キリスト教系施設にあつてさえもキリスト教の影響力の相当な低下を示しており、キリスト教社会福祉の危機的な段階とされ、将来キリスト教系施設の非キリスト教化が危惧されている。

日本キリスト教社会福祉学会編 1998『社会福祉実践とキリスト教』ミネルヴァ書房。

長谷川重夫 2001「現代におけるキリスト教社会福祉施設の課題」『キリスト教社会福祉学研究』第33号 pp.4-10。

坂本正路 2010「教会とキリスト教施設に関する調査」『キリスト教社会福祉学研究』43号 pp.106-109。

- (5) 安藤泰至 2017「優生思想と『別のまなごし』:宗教・いのち・障害と共に生きること」『宗教と社会貢献』8(1)pp.3-23。

深谷美枝 2017「社会福祉実践の現状におけるキリスト教スピリチュアリティの機能—『障害福祉ソーシャルワーカーの語り』より—」『宗教と社会貢献』8(1)pp.25-53。

寺戸淳子 2017「市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義:『権利』と『祝

祭』『宗教と社会貢献』8(1)pp.55-73。

頼尊恒信 2017『『社会モデル』の思想と宗教：共生する社会の構築に向けて』『宗教と社会貢献』8(1)pp.75-99。

- (6) 深谷 2017 前掲論文。
- (7) 深谷 2017 前掲論文, pp.26-30。
- (8) 吉田 2003 前掲書, p.65。
- (9) 吉田 2003 前掲書, p.66。
- (10) 吉田 2003 前掲書, p.67。
- (11) 上田千年 2001『『喜・捨』ということ』『仏教福祉』第3,4巻, pp.69-80. 仏教におけるボランティアリズムには慈悲に加えてこのスピリチュアリティが強いことが述べられている。
- (12) 眼施, 和眼悦色施, 言辞施, 身施, 心施, 床座施, 房舎施で財物を損せず, 大果報を得るとされる。吉田 2003 前掲書, p.69。
- (13) 奈倉道隆他 2001「第三回紙上シンポジウム—祖師の教説と福祉思想」『仏教福祉』第3,4巻, p.49。
- (14) 吉田 2003 前掲書。
- (15) 吉田 2003 前掲書, p.99。
- (16) 仏教福祉, 仏教社会福祉などの用語はその分野でも検討されている。そこでは仏教福祉は包括的なもの, 仏教社会福祉はその下位概念とされている。ここでは一応包括的な概念として仏教福祉を用いている。菊池結 2015「日本仏教論の展開—『仏教社会福祉』の定義をめぐる議論に焦点をあてて—」『大正大学大学院研究論集』第39号, pp.53-64。
- (17) 船本淑恵 2008。「仏教系社会福祉施設の現状と仏教社会福祉実践の思想的基盤—浄土真宗本願寺派社会福祉施設実態調査報告(概要)—」, 長上深雪編『龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター研究叢書第五巻 現代に生きる仏教社会福祉』。
- (18) 菊池 2015 前掲論文, p.60。

- (19) 仏教者のインタビューは自覚的な信仰者ということで、仏僧とした。1人Bさんのみ、ご本人の体調の関係で面接が出来ず、往復のメールインタビューとなった。分量的には一万字近く、質量ともに90分インタビューと同等以上となっている。
- (20) 浄土宗において得度は幼児洗礼のような意味を持ち、修行に入ることを意味しない。
- (21) 「正像末和讃」『註釈版聖典』 p.617。
- (22) 金子大栄校訂 1979『歎異抄』岩波書店, p.39-40。
- (23) 自他不二は絶対平等、自身と他人には区別などなく、自身を救うことと他人を救うことは同じことであるという言葉。平等覚については親鸞は、阿弥陀如来の救いのはたらきを光にたとえて示し、「解脱（げだつ）の光輪（こうりん）きはもなし 光触（こうそく）かぶるものはみな 有無（うむ）をはなるとのべたまふ 平等覚（びょうどうかく）に帰命（きみょう）せよ」と浄土和讃のうち「讃阿弥陀仏偈和讃」の冒頭にある。平等ということへのコミットメントは強いものがあり、誰でも光を受けているということに制限を加えるということは結局自分も排除することになる、という考え方が見られる。
- こんな法話が語られてもいる。浄土真宗本願寺派 <http://www.hongwanji.or.jp/mioshie/howa/min141120.html>, 2018.9.9 閲覧。
- (24) これもまた、平等覚、阿弥陀仏 37 号の 1 すべての事物の無差別平等にあたるのかもしれない。
- (25) 深谷 2017 前掲論文, p.49。
- (26) ニーバー, R. 2010『ソーシャルワークを支える宗教の視点』高橋義文他訳 聖学院大学出版会, p.83. 原著は Niebuhr, R. 1932 “The Contribution of Religion to Social Work” Columbia University Press.
- カンダ, E 2014 前掲書, p.165。
- (27) ニーバー 2010, 前掲書, pp.84-87。
- (28) 吉田 2003 前掲書, pp.1-3。